

## シドニーの柔道を見て

小俣幸嗣

### A report on Judo in the Sydney Olympic Games

Koji Komata

筆者は全日本柔道連盟強化委員会科学研究部員として、主に男子のサポート体制に関わってきた。今回シドニーオリンピックに支援役員として同行し、柔道選手の調整場所に起居して最終調整と試合を見てきたので、試合前の調整や会場の状況について報告する。

#### 1 オリンピックの柔道

試合は、2000年9月16日(土)～22日(金)の7日間、シドニー市内ダーリング・ハーバーにあるエキシビジョンセンターで行われ、400選手が参加した。

オリンピックの柔道競技は東京大会に始まるが、バルセロナ大会(1992年)から公式種目となった女子柔道の参加を理由に、肥大化を抑制するため出場資格に制限が設けられた。アトランタ大会(1996年)からは世界選手権や大陸選手権での成績が参加資格となった。

このため日本代表選手は決定されても、1999年の世界選手権大会で出場権を獲得できなかった4つの階級(男子66.73.81kg級、女子57kg級)については、出場権をかけた5月のアジア選手権大会(大阪)まで出場決定が持ち越された。これらは最終的に出場資格をとり、日本は今回も全階級に選手を派遣することができた。全階級に男女とも出場権を得たのは、開催国をのぞけば、日本、フランス、キューバの3カ国である。

日本は男女各7階級において、8個(金4、

銀2、銅2)のメダルを獲得し、金メダルおよびメダル獲得数でトップであった。因みに2位はフランスの6個(金2、銀2、銅2)、3位はキューバの5個(金2、銀2、銅1)である。上位を占めたこれらの国が強豪国といえるだろう。

世界の水準が向上しメダル獲得国が分散している、というのが国際大会報告の常套句になって久しい。過去のメダル獲得国数をみると、ソウル大会は15カ国、バルセロナ大会20カ国、アトランタ大会17カ国で、シドニー大会は25カ国(男子17カ国、女子13カ国)である。とりわけ旧ソ連からの独立国がアトランタ大会の2カ国から7カ国へと増えており、これらが新興勢力となっていることが分かる。

#### 2 調整

代表選手は男女とも2000年4月に決定された。本学からはOGの檜崎教子(52kg級)、2年生の前田桂子(63kg級)の二人の世界チャンピオンが代表に選ばれた。

そのあと大会までは国内外で合宿を行った。

男子はスペインを含む8回、女子はフランスを含む5回である。特に夏場、7月に女子は北海道清水町において1週間、男子は8月に標高1000mの長野県富士見高原において3週間の合宿を行い、涼しい環境で最後の追い込み練習をした。

オリンピックは試合期間が長く、現地入りしてからの調整も楽ではない。今回は現地との時差が2時間であることや練習相手の確保等を考慮して、はじめて選手団は2班に分かれて出発した。出場日によって9月8日(金)には60kg～81kg級、48kg～63kg級の選手、13日(水)には90kg～100kg超級、70kg～78kg超級の選手達であった。

現地では調整用の道場として、試合会場から車で30分位の郊外にある東海大学菅生学園の研修所を利用した。牧場のような森に囲まれた敷地に、約130畳ほどの広さの柔道場が独立している。他に食堂を中心とする管理棟があり、その隣に4人一部屋で10室の宿泊施設がある。今回のオリンピックでは柔道のあと、レスリングの代表団の調整にも使用されている。

柔道のオリンピックチームは、ロサンゼルス大会(1984年)から代表選手の稽古相手を務めるためのパートナーを帯同している。今回も強化選手の中から各選手に一人が同行した。これら男女のパートナー、選手村に入らないコーチ、栄養・ビデオ・心理のスタッフらが研修所に宿泊し自炊生活を送った。

柔道場に入って代表選手と稽古相手の調整を見守るのは医者、担当コーチらだけである。所属会社や学校のコーチ等関係者はガラス越しに道場の外から中を見ることになるが、見物できるように窓が大きく作られているのですべて見渡せた。しかし、報道陣は敷地にも入ることができないので、敷地の入口で出入りする選手やコーチを待ちかまえて取材することになった。

### 3 コンディショニング

試合は毎日男女各一階級が行われ7日間続く。前回のアトランタは重い階級から行われたが、今回は軽い階級から始まった。世界選手権では無差別が最後に行われる関係で、重い階級から始められるが、今回はその逆であった。選手個人の好みもあろうが、いつも最後まで調整をして試合に臨んでいる軽いクラスの選手達は、注目度の高い初日の試合ということも含めて、違った感じで試合を迎えたことであろう。

代表選手は選手村から毎日コーチが運転する車で通ってくる。朝9時から12時まで、道場の規模、選手の集中などの理由で男女は時間帯をずらして汗を流した。

内容は入念なウォームアップ、打ち込み、投げ込み、軽い乱取り、組み手の研究など、普通の選手が試合前に行うものと大きな違いはない。強度や雰囲気は選手の個性そのものである。

練習を終えると、減量している選手などは栄養スタッフが作った食事をとってから選手村に戻る。気晴らしのため、応援にきた同僚らと街に出る者もいる。

大会期間は試合が13時から始まるため、研修所の関係者は休む間もなく車や、電車で会場に出かけ観戦、応援をする。選手達は希望により完全休養日を取ることもできるよう配慮された。最終日まで長い調整を行う100kg超級の篠原信一、70kg超級の山下まゆみ選手らの胸中は察するに余りある。

試合日を迎えた選手には、朝の計量を終えたあと試合開始までリラックスするため市中のホテルに部屋が用意された。

### 4 試合会場

シドニーの街中も含めて、大競技会が開催されているような混雑はほとんど感じられず、入退場なども簡単だった。試合会場は9000人

が収容可能というホールで、席は仮設のスタンドである。試合は二部に分かれており、前半は13時から17時頃まで予選と敗者復活戦が行われる。約1時間から2時間の休憩をはさんで、後半の3位決定戦、決勝戦が18時半頃から行われ表彰式が終わる頃は22時を過ぎた。

私の入場券は前半が45豪ドルと後半が90豪ドルであり、合わせて1日約10,000円となり7日間すべてみると7万円になった。

試合場は1m位の台の上に設置されているため、観客席の一番前からは、畳が目線くらいになる。台上は緑の畳を赤い枠で囲むように畳が敷いてある。ここまでが場内であるが、その外側の場外部分、相手を投げ出したり、寝技も可能な場所は薄いブルーで、しかも「sydney 2000」と文字が入っていた。

外国の畳は日本製より大きい1m×2mであり、試合場内は8×8mのサイズで日本の試合場9.1m×9.1mよりも狭い。柔道衣は日本人の目にも慣れてきた青対白であり、オリンピックでの使用は初めてである。

観客は柔道関係というより、オリンピックを楽しみに来たという感じの団体グループが多く見られた。サッカーの日本戦と近い日はその関係と思われる日本人、韓国人のグループが大挙して押しかけた。そのため、柔道を知っている人間が集まる欧州の大会や世界選手権に見られるような、美しい技に対する惜しめない称賛や拙劣な審判に対する激しいブーイングなど、いつもの柔道会場らしい雰囲気はなかった。ただ、自国の選手に対する派手な組織応援のみが繰り広げられ、その動きで視野を遮られることもたびたびあった。

#### 4 テレビ

席は指定で毎日変わった。試合がよく見える正面席の中心には各国のテレビ局があるため、我々の座席はその奥の天井に近い席か、反対側の席になる。試合の細かい部分まで見ようとしたら、残念ながらテレビの方が便利

であると言わざるを得ない。会場の大きな画面には過去の名場面映像はよく流れていたが、進行中の試合のリプレイは何回も映されることはなかったのも、意外に細かな状況まではわかりにくいことが多かった。今まではそれほど疑問も感じずに座っていたが、わざわざ会場に足を運んで見ている観客にも、リプレイがスクリーンで再現される位のサービスが欲しいと思われた。

柔道は日本では多くの時間が放映されたようであるが、90kg級で吉田秀彦選手が敗れた日は、人気がないと判断されたのか、それ以上の放映はなかったようである。外国人同士の試合とはいえ、格闘技の醍醐味である重量級の迫力ある攻防が紹介されなかったのは、関係者として残念である。

一方、現地のメディアに柔道が扱われた形跡はほとんどなく、オーストラリア選手が銅メダルを獲得した日でさえ、小さなものであった。後日、アメリカの柔道仲間からオリンピックのビデオを頼まれたことを考えると、アメリカでも同じような状況だったのかもしれない。

#### 5 審判員

国際大会では毎回といってよいくらい審判問題が指摘されており、これはオリンピックに限ったことでも、今に始まったことでもない。実際に審判に関する問題は、世間の耳目を集めた100kg超級の決勝ドゥイエー篠原戦以外にも幾つか見られたのである。

しかし今回の場合、日本では特にメディアの注目度と視聴者の数が普通ではなかったため、反響も柔道界だけに止まらず、国民的な議論の対象となった。そして技の評価や罰則の適用など単に審判員の資質の問題を超えて、疑惑の判断を是正できないという柔道の競技方式や、ルールの脆弱性までも指摘されることになった。

日本側は判定に対し抗議し、それは翌月の

国際柔道連盟審判委員会、理事会等で検討されたが、結論は多くの人が予測したように現状を容認するようなものであった。

これに対し、審判員の資質の向上はもちろんであるが、高度化、多様化した選手の技術に審判員が対応できていないという認識から、競技の近代化のためにビデオなどの科学機器を導入すべきであるという積極的な意見も出されている。これを受けて、日本がまず新しい制度を検討し提案していかなければならないという考えのもとに、全日本柔道連盟の審判委員会は2000年12月にビデオ導入のために試行を始め、資料収集に乗り出した。このような動きに対して、国際柔連の審判理事は取り入れる考えはないことを表明している。

## 6 おわりに

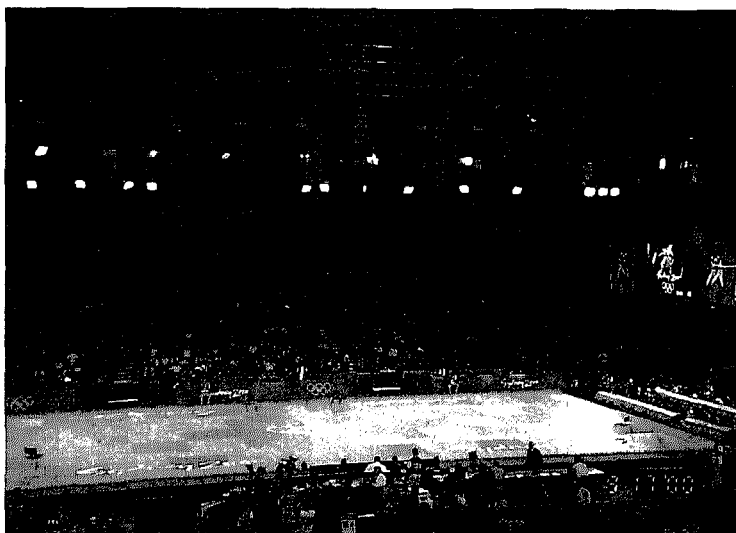
春先のさわやかな気候のなか、柔道は初日の男女二階級金メダル獲得で華々しく開幕し、井上康生選手の完勝で最高潮に達したが、最終日はすっきりしない幕切れとなった。本学

関係では、檜崎が銀メダルを獲得したが、前田は全く力を発揮できずに惨敗した。

結果として、金メダル、メダル獲得数において、日本はトップを保った。さらに技術的にも日本柔道の健在ぶりと高い技術が強く印象づけられたし、柔道が技の勝負にもどったことが多くの人に理解された大会になったといえる。

一方で、国際スポーツとしての柔道の問題点も浮き彫りにされた。今後は、競技方法も強豪国もさらに変わっていくことであろう。それは止めることができないことである。しかし、柔道の技の醍醐味や「一本」の魅力が失われるようなことがあってはなるまい、と強く思った。

最後であるが、本学の竹内善徳教授がアジア柔道連盟の会長として、また中村良三教授が国際柔道連盟教育理事として、会場で紹介されメダル授与の栄に浴したことを特に記して報告を終えたい。



試合会場